

北澤 毅 著

『文化としての涙：

感情経験の社会的探究』

勁草書房 2012年 単行本 232頁 ¥3,150 (税込)

山田 鋭生

本書の冒頭で編著者の北澤毅氏が述べているように、文字どおり人間の誕生は泣くことから始まる。われわれ人間は、誰もがみな「泣き」という行為とともにこの世に生を受けるのである。そして泣くのは生まれたばかりの乳児だけではない。大人になるにつれて、われわれはさまざまな場面で「泣き」や「涙」に出会うことになる。たとえば、映画やテレビドラマを観た際の感動から泣くことがあるし、葬儀の場で涙を目にすることはごく自然なことである。このように、われわれ人間は誕生から臨終まで幾度となくこの「泣き」に接することになるのであるが、本書が探究の対象とするのはこうしたわれわれの「泣き」という文化である。

ところで、通常「泣き」という行為には悲しみなど、なんらかの感情と深く結びついているものと考えられている。そして、われわれはある人物の「泣き」を観察した際、その人物がなんらかの感情を「もって」泣いているのだということを想定している。だからこそ、相手の立場に立つことや共感をすることによってそのような他者の感情を理解しようとするのであるが、そのとき、われわれが暗黙のうちに想定しているのは、感情はわれわれの内面にあるものだという「心的状態の内在説」である。感情とは、意図や動機などと同じく「心的状態」についての概念であるが、われわれが「嬉しい」「悲しい」といった感情を内面にもっているという考え方は、日常的な経験や感覚とも一致するし、社会学や心理学の分野においてもそのような前提が優位を占めている。われわれの内面には「真の意味で」自分自身しか知りえない感情が存在し、それは他者に悟られないように隠しておくことが可能なものであるし、逆に他者を

欺くために偽の感情表出を行うことも可能であると考えているのである。

本書はそのようなわれわれの認識自体に社会学という立場から問い直しを迫る。たとえば、われわれはまだ言葉を発することができない子どもが笑っているときには「あー嬉しいんだねー」などと他者の感情を容易に記述することができてしまうし、他者と一緒に泣いたり笑ったりすることができてしまう。そのような事態は、「心的状態の内在説」によっては説明できないのではないだろうか。本書においては、感情とは他者からの理解に開かれたきわめて社会的なものであり、社会のメンバーにとって観察・記述が可能なものであるとされ、なぜわれわれが「心的状態の内在説」にリアリティを感じるのかが問い直されているといえる。そして、本書は「泣き」や「涙」によって表される感情の観察・記述可能性を「文化」と定義し、われわれが実践し、実際には見ているが気づかれていない(= seen but unnoticed)ような「心的事象」の社会性・文化性を明らかにしていくことを狙いとしているのである。また、本書は「泣き」や「涙」にまつわる感情というテーマに関心がある者にとって大きな刺激となる一方で、本書が共通して採用している質的研究という研究方法を学びたい者にとってもじつに示唆に富んだ内容となっている。

なお、本書は全Ⅲ部から構成されている。第Ⅰ部においては、まず、上に述べたような本書に取められた各論文に通底する広義の構成主義的研究アプローチが表明され、その後に感情社会学の理論的検討と新たな感情社会学理論の構築が行われている。そして「社会化される涙」と題された第Ⅱ部では、われわれが日常的相互行為においていかに感情を記述し、子どもをわれわれの社会のメンバーに仕立てているのかを明らかにする。その上で、発達や理解、しょうがい児などといったテーマに関して新たな視座を提供している。第Ⅲ部は「制度化される涙」というタイトルのもとに、マンガ、学校と卒業式といった広い意味での制度が研究の射程に取められ、集合的記憶や身体実践と感情との連関が明らかにされていく。